

## 編 集 後 記

日本消化器外科学会誌編集委員会では、長年勤めてこられた上西紀夫先生から桑野博行先生に委員長が交代され、昨年は新たな編集委員会が発足しました。最近、本誌への投稿論文数が増加し、様々な原著論文、症例報告が寄せられております。消化器外科の分野においては、必ずしも欧米の標準治療が本邦の標準治療とはならない場合もあります。その点では、本誌の原著論文は英文誌では取り上げることができないような重要な論文の掲載が可能であり、欧米の結果だけではなく、本邦の結果を提示するという点で、本誌の担っている役割は大きなものと考えます。また、症例報告も増加しています。症例報告は、確かに「たった1例」の報告かもしれませんが、しかし、「たかが1例」の報告ではなく、「されど1例」の報告でもあります。時には、この1例によって新たな研究が進む端緒となる場合もあります。現在、発癌関連遺伝子として非常に重要な APC 遺伝子の発見も、そもそもは症例報告が端緒となりました。家族性大腸腺腫症の亜型の Gardner 症候群という疾患が存在します。これらの疾患は、ある原因遺伝子の異常により発症するものと考えられていましたが、具体的な遺伝子は明らかとなっていませんでした。1986年に Memorial Rosewell Park の Dr. Herrera は、Gardner 症候群の42歳の男性に第5番染色体長腕に欠損があることを Am J Med Genet 誌に症例報告しました。その後、これらの疾患の原因遺伝子は第5番染色体長腕に存在するだろうということで、精力的に研究が進みました。その結果、最終的には1991年に、原因遺伝子として第5番染色体長腕に存在する APC 遺伝子が同定されることになりました。実は、この Dr. Herrera のところに私自身留学することになっていました。その彼に、留学前の連絡を取り合っている時に、「どうして Gardner 症候群の症例の染色体を検討して症例報告を行ったのか」と手紙で聞いたことがあります。彼は、「今度 New York で会う時にゆっくり話そう」と返事してくれたのを覚えています。しかし、結局この直後に Dr. Herrera は急逝してしまい、答えは分からないままとなってしまいました。Dr. Herrera の論文は、非常に大きな影響を与えた、まさに「されど1例」の論文であったと思います。

本邦における今後の消化器外科の発展のためにも、本誌への、貴重な原著論文ならびに症例報告を期待しております。

(渡邊聡明)